

*『純理』における「量」は「全称的（普遍的）判断」「特殊的判断」「单称的（個別的）判断」に区分される。趣味判断は单称的であるが同時に普遍的な適意を示す特殊な判断である。

6. 美は、概念を欠いたまま普遍的な適意の客観として表象される

対象は純粹悟性概念の規定によって普遍的な認識となりうるが、美は、無規定的な悟性のまま普遍的に伝達される。

→「誰かが、対象に対する適意が自分にとって一切の関心を欠いていると意識するとき、彼はその対象を、誰にとっても適意の根拠を含んでいるに違いないとしか判定しない」。つまり美は「普遍的な適意の客観」として表象され、概念から生じるように思われる。

→しかし、美は客観的对象の現前とは無関係である。

→「一切の関心を欠くという意識を伴う趣味判断には、あらゆるひとに対する妥当性の要求が、客観に置かれた普遍性を欠いたまま（概念を欠いたまま）結びつかねばならず、言い換えれば、趣味判断には主観的普遍性への要求が結びついていなければならない」

7. 美と快適や善との比較

美に対しては「これは私にとって美しい」といった個人的な判断を下せない。「たんに自分に対してだけ判断しているのではなく、あらゆるひとに対して判断している」。

→快適；「快適なものに関しては、各人は自分自身の趣味を持つ」。

→善；「判断はあらゆる人に対する妥当性を要求するが、善いものはただ概念によってのみ普遍的な適意の客観として表象される」。

* § 57 注 1、「美的理念（美）」は概念を欠いたまま直観（図式化）し、「理性理念（善）」は直観（図式）が適合し得ない（超感性的な）概念を含む。

8. 適意の普遍性は、趣味判断において、たんに主観的として表象される

①反省趣味（美的判断）は主観的普遍妥当性を持つ

→快適なものの趣味判断（「感官趣味」）と、美しいものの趣味判断（「反省趣味」）を区別し、両者はともに美的判断を下すものの、感官趣味は個人的であり、反省趣味は「共通妥当的（公共的）判断」とする。

→反省趣味は共通妥当性であるが、客観的普遍妥当性ではなく、主観的普遍妥当性である。

②純粹悟性概念に基づく判断と美的判断との差異

→純粹悟性概念に基づく判断は客観的個物が、同時に主観的普遍妥当性を有する。しかし美的判断は主観的普遍妥当性から論理的な客観的妥当性を推論できない。美的普遍性は特殊な種類の普遍性であり、「この普遍性は、美という述語を、その全論理的領域において考察された客観のどの概念とも結びつけないが、それでもこの同じ（美という）述語を判断するひとの

全領域へと広げる」。

→趣味判断は「論理的な量」に関して言えば、「このバラは美しい」という単称的判断である。

多くのバラの比較から帰結する「全てのバラは美しい」という全称的判断は、美的判断ではなく、美的判断に基づく論理的判断である。

③普遍的賛成は、一つの（美的）理念である

→趣味判断に要請されるのは、概念を媒介としない適意に関する「普遍的賛成」にすぎず、全ての人に妥当であると見なせる美的判断の可能性でしかない。

9. 趣味判断において快の感情と対象の判定はどちらが先か

①快は趣味判断の結果である

→「快の感情」が先行した場合、快が対象の表象に依存して個人的妥当性しか持たないため、趣味判断における普遍妥当性を与えることができず、自己矛盾に陥る。

→「与えられた表象における、心の状態の普遍的な伝達可能性」が「趣味判断の主観的条件」として先行し、それが「対象に対する快を結果させる」。

②美の判定に当たって何が普遍的に伝達されるのか

→普遍的に伝達可能なのは「認識と、認識に属す限りでの表象」であるが、趣味判断においては「対象についての概念」が欠けている。そのため普遍的に伝達されるという判断の根拠は、「表象諸力（構想力、悟性）が、与えられた表象を認識一般に関係付ける限りにおいて、表象諸力相互間」の触発作用によって発生する心の状態にある。

→表象から認識が生じるためには「直観の多様なものの合成に向かう構想力」と「諸表象を合一させる概念の統一に向かう悟性」という二つの表象力（認識能力）が必要である。

→趣味判断は「規定されたいかなる概念も諸力のある特殊な認識規則へと制限」されることがないため、構想力と悟性は「自由な戯れ」の状態にある。したがって趣味判断において生じる心の状態とは、「認識一般に向けられた、与えられた表象における表象諸力間の自由な戯れの感情という心の状態」である。概念なくして図式化する構想力。

→美の判定に当たっては、構想力と悟性の自由な戯れの状態こそが普遍的に伝達される当のものである。美的共通感覚。

③普遍的伝達可能性は（概念による）知性的なものではなく、「感覚的作用」による

→感覚は、構想力と悟性の自由な戯れへと引き込み、「一致させる活動へと活気」づけ、さらに二つの力の調和を受容する。「趣味判断が要請するのはこの感覚の普遍的な伝達可能性」である。

量の分析から帰結する、美しいものの解明

「美しいのは、概念を欠いたままで普遍的に気に入るものである」

*セザンヌにおける「事実問題（＝感覚的作用）」

*美の分析論は観照者の観点に立つ美学を提示している。美の所在について。